

# 先人の知恵から

## 6

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

諺や故事に少しは親しんでもらえただろうか？子育て支援に繋がる故事・諺・言い伝えなどを探していると、今も昔も本当に変わらないと改めて感じる。

今回は「い」の行から次の7つ。

- 一枚の紙にも裏表
- 一葉目をおお蔽えばたいざん泰山を見ず
- 一いち陽来復ようらいふく
- 一を知りて二を知らず
- 一寸の虫にも五分の魂
- 一朝の怒りに其の身を忘る
- いつまでもあると思うな親と金

### ＜一枚の紙にも裏表＞

物事は表面だけで判断せず、裏面も見て判断する必要がある。どんなに簡単そうに見える物事でも中身は複雑だというたとえ。また、人間にも本音と建て前がある。人の心は外見だけでは分からぬ。

この諺は、対人援助の職にあるものなら当然気を付けているであろうが、子どもでも大人でも同じように裏表を持っていると言う事をつい見逃してしまうことがある。

最近の子どもたちに見られる傾向として、表面を取り繕う事がとても上手くなったように思う。保護者だけではなく、我々支援者も容易に騙される。子どもは純粋だなど

というのは過去の話で、これだけ情報過多の中で育った子どもたちは、我々が思うよりずっとしたたかである。

涙を流しながらも、ペロッと舌を出すことなど良くある話となった。いじめや体罰、虐待の話が世間で騒がれている中、幼稚園児でもこういった言葉についてある程度知識を持っている。母親が余りに言うことを聞かず、乱暴な幼稚園児の我が子を叩こうとしたら、「虐待だ〜」と叫ばれたと話されていた。

スクールカウンセリングをしていると、相談に来た子どもや保護者の味方として話を聴く。先生や友達がどんなに酷い事をしたかなど、訴えは他者批判になることも多い。話を聴きながら、気持ちには共感しつつも、解決の道を模索するとき、子どもの訴えの裏に何かがあるか、保護者の訴えの裏に何が隠れているのかを探る必要がある。それを探るために質問がある。裏も表も無いのか、大いに裏表があるのか、裏があるならそれを本人は意識しているのか、そんなことを思いながら質問を考える。雑談の中でも見え隠れすることもある。緊張して居る時、ガードして居る時は見えなくても、気が緩んだ瞬間に見せる本音や裏の顔もある。

支援者として、相談者の言に丸めこまれたり、操られたりするののないように、この言葉を常に心に留めておきたいものだ。

英語では・・・

Look on both sides of the shield. (盾の両面を見よ。)

### ＜一葉目を蔽えば泰山を見ず＞

目先のわずかなことにとらわれると、物事の道理がわからなくなり、正しい判断ができなくなることのたとえ。一枚の木の葉でも目の前を蔽うと泰山の様な大きな山も見えなくなる。出典は鶡冠子。

筆者はこの言葉を時々子育て中の母親に使っている。日々子育てに奮闘している母親は、ふとした瞬間に物事が見えなくなってしまふ事がある。「真っ白になった」と言うのも同様だろう。解離まではいなくても、小さな事でカッとなってしまふ事は度々ある。

例えば、幼児は急いでいるときに限って手のかかることを仕掛けてくる。さっき替えたばかりのおむつなのにウンチがたっぷりとか、着替えさせたと思ったら飲み物をこぼしたり、吐いたり、何とか靴を履かせたら、「おしっこ」と言われたり。

母親は出かけるための準備に追われ、やっとというタイミングに出鼻をくじかれる。時間のあるときであれば何でもないようなことも、「時間が無い」「急いでいる」「〇時までに出なくちゃ」という一葉のために、子どもの本来の姿を忘れてしまう。子どもは他人の時間軸に合わせて生きてはいない。一人の人間を育てる過程において、何が大事であったかを見失ってしまうのである。

あちこちで、母親が「早くしなさい！」と言っているのに出会う。「早く」しなければならないのは、誰の都合だろう？急かされることは子どもたちにとってとても辛い事ではないだろうか？

他にも、周囲からの何気ない「発達障がい」という言葉に過敏に反応した母親が、

子どもの良い面を見失い、ガミガミと叱ったりということにも出会う。

相手は子どもなんだから、自分の都合に合わせてくれると期待するのが間違いで、不都合はあらかじめ計算に入れて準備するとか、なにかあっても簡単に動揺せず大きく構えて、広い視野を持つことができれば、子どもに向かう姿勢も変わるだろう。支援者として、保護者に何よりも我が子を「真っ直ぐ、ありのまま見つめること」を勧めて行きたい。

### <一陽来復>

良くない事や不幸が続いた後には、良い事や幸運がめぐってくる。寒い陰気な冬が終わり、やがて暖かい陽気な春が来ることから。「一の裏は六」も同様の意。出典は易経。

普通学級在籍中の発達障がいの子どもの相談で、度々母親から語られるのは、学校から子どもがしでかした問題行動についての報告の電話が毎日のように来て、電話恐怖症になるということである。そんな時にこの言葉を使っている。

子どもは日々成長する。小学校では 2-3 年生の頃に問題行動が悪化することがある。学校では対応に苦慮し、保護者に電話をする羽目になる。確かに大変だろうが、いつまでもこのままではない。ADHD でも、かなり重篤なケースであれば投薬が必要となるだろうが、薬を使わなくても 4-5 年生になると、一気に落ち着くケースもあるし、先生の対応次第で落ち着く場合もある。発達障がいがあるだけでも、母親にとっ

ては辛い現実であり、それを受け止めきれているかどうかもわからないのに、毎日のように子どもの問題行動をあげつらっても何の解決にもならないだろう。良い行動を探して増やしていくことが本来の指導の形である。勿論他児に怪我をさせたりした場合は別ではあるが、小さなことまで報告される母親の身にもなって欲しいというのが母親側の思いであろう。

そんな辛い日々を送っている母親に、希望を持たせてあげることも我々支援者の務めである。有能な支援者の多くが ADHD の傾向を持っていたり、世の発明の多くを手掛けているのが、自閉症スペクトラムの傾向を持った人だったりする。母親が見逃してしまうような子どもの良いところを、探して教えてあげることが大切であろう。そして一陽来復、必ず良い日々は待っていると。

英語では・・・

The darkest hour is before the dawn.  
(夜明け前が一番暗い)

### <一を知りて二を知らず>

知識や見識が狭く、応用力がよわいことのため。事物の一方だけを知って、他方を知らない事から。出典は荘子

最近、情報がこれだけある割にというか、あるせいでなのか、応用が利かない人が増えたなと感じる事がある。それは、保護者も子どもたちも同様である。

「〇〇にこのように書いてあったから、この子は、××に違いない」という決めつ

けや、「A といえば A。A' は A とは別物」と言う許容量の狭さや、似たような事への対応について「このやり方は教わったが、こっちのやり方については教えてもらっていない」と言う応用の無さに出会う。

一は知っているが、それに伴って二や三を知ることは難しく、一つ一つを教えて行かねばならない。子どもたちや保護者から「マニュアルはないのですか？」と聞かれることも増えた。

子育て中の母親たちへの講座では、「子育てにマニュアルは無い」と伝えているが、質問の多くは「Know-How」に関わるものである。「こういう時はどうすれば良いか？」と。それを知りたい気持ちは分かるが、例えば「全然寝ない」と訴える母親がいるとすると、質問は当然「どうしたらよいか？」である。「全然寝ない」と言っても程度問題である。最近は睡眠障害の子どもも増えたので、全く寝られなければ当然投薬が必要になるだろう。しかし、よく観察すれば「全然寝ていない」のではなく、「所々で寝ている」のである。夜、寝るべき時間に寝ていないと言う事はあるかもしれないが、睡眠時間がゼロと言うわけではない。危なくないようにして部屋を暗くし、母親は寝ていればそのうち退屈して子どもも寝る。要は根競べだろう。母親が黙ってみられなくなって起き、子どもに関われば益々寝なくなるのだから。しかし母親たちは、ネットで調べて「小さい子でも睡眠障害があると書いてあった。うちの子もそうではないか？」と聞いてくる。世の中の余り寝つきの良くない子どもたちが全て睡眠障害なのか？食の細い幼児のことで「この子拒食症だと思う」と言った母親もいた。

食が細ければ皆拒食症なのか？

情報を調べるなら、徹底的に調べて理解してくれば良いが、結構中途半端に情報を得ている方が多い。

中途半端な知識は混乱の元にはなるが、何の解決にもならないだろう。我々支援者としては、溢れる情報をどう読み取り、理解すべきかを自分で判断できるように教える必要があるだろう。そして、情報の広がり、或いは応用についても説明すべき時代になったことを認識しなければならないのかもしれない。

### ＜一寸の虫にも五分の魂＞

*小さいものや弱い者にも、それ相應の意地や根性があるから、侮ってはいけないということ。*

幼少期の心の傷が生涯に渡って影響していることからみて、まだ小さいから分からないだろうと、DV 家庭の子どもに与えた影響を考えないのは問題だと思うようになった。

胎児であろうが、ゼロ歳児であろうが、嫌な思いは身体の記憶として残っているようだ。カウンセリングで出会う方々に対応していると、度々そういう現実に出会うからだ。小さいうちは叩いて教えるべきと言う人がいるが、これは大きな間違いである。小さくてもその年齢なりの理解はある。言葉でやり取りができるようになってからは、言葉で指示する事が出来るが、その分言うことを聞かなくなって、イラっとして叩くと言う事態にもなる。大きくなってからの事は当然覚えているので、親としては気を

付けるようになるが、小さい時は意外と無視されている。気を付けねばならない。

また、2歳児は、一番手のかかる時期で、母親たちは対応に苦慮しているが、この時期は特に「五分の魂」がはっきり見られるときではないかと思う。どううまく、周囲の大人が対処するかは、その子の成長、特に思春期の心の成長に大きく影響する。

言たってわからないから叩いて教えるではなく、保護者にとって困る行動をとらせないように環境調整をしたり、本人の気持ちを潰さないように別の事にそれとなくシフトさせたりすべきだろう。ここは保護者の腕の見せ所なのであるが、どうも楽しみながらの子育てが難しいようだ。

小さな虫にもその意地や根性がある。蟻や蜂どんな小さな虫でも、生きるための行為として、物凄いエネルギーを使って頑張っている。

ましてや、高度な脳を持った人間の子どもに、意地や根性が無い筈がない。意地を認め、根性を認めつつ、良い行動に、保護者にとって好ましい行動に変化させていけるよう、保護者を支援して行くのが我々の仕事である。子どもの意地や根性を無視しそんな保護者が居る時には是非使ってほしい諺ではなかろうか。

### <一朝の怒りに其の身を忘る>

一時的な怒りのために自分の立場を忘れてしまうこと。そのような行動は自分の一生を駄目にするばかりか、親・兄弟にまで災いを及ぼすという戒め。短気は損気も同意。

一時の怒りは子育て中の保護者や学校現場で度々みられることで、その怒りが結果的に様々な問題を起こしている。カッとなって子どもを突き飛ばした結果として、頭をぶつけて大怪我になったり、殺してしまったり。虐待では、故意に子どもを置き去りにしたりするケースとは異なり、カッとなってと言う事例は多い。何度言ってもきいてくれなかったとか、泣き続けられたとか、保護者にとって限界まで追い詰められた結果、カッとなってと言う事が起こる。

学校での体罰や、暴力行為も同様である。自分の思い通りにならない事への怒りが、結果的に自分や周りの人へ取り返しのつかない、大きな影響を与えるような結果を持たず。自分の感情をコントロールできないようでは、先生や指導者としては失格だろう。先生も人間ではあるが、教育者である。体罰などの暴力では何も解決しない。「愛の鞭」という言葉がかつて台頭していたが、根性を付けるのに暴力が本当に必要なのか？鞭は愛情なのか？大いに疑問である。

どんな時も、冷静に対処しているのは一時の感情で行うのとは大きく異なる。親としての立場、教師としての立場、部活動の指導者としての立場など、常に意識し、冷静に対処できるためには、自分が子どもと同レベルにならない事ではないか。大人とは「大きな人」と書く。心が大きければ、カッとなって其の身を忘れることなど起こらないだろう。

相手に怒るのは「自分の思い通りにならない」からだろう。つまり「思い通りになってくれると期待してる」＝「自分はこんなにやったんだから当然期待通りになって

くれるはず」という甘えがそこにある。相手も同じ人間なんだから思い通りにはならないのが当然。むしろ思い通りにしようなんていうのが傲慢であるし、伝わらないのは自分の責任でもある。「自分は指導してやってるんだ」みたいな上から目線では、結局子どもと対立することになる。「考えを聞いてもらってるんだ」くらいの気持ち、相手への尊敬と感謝の気持ちがないと広い心は生まれない。たとえ相手が子どもでも、相手を尊重することが、大人が「大人」に、「大きな人」になるということではなからうか。

### ＜いつまでもあると思うな親と金＞

人に頼る心を捨て、又儉約を心掛けよという戒めの言葉。親はいつまでも生きて面倒を見てくれると思っではならず、金も使えばなくなってしまうという意から。

この言葉は、不登校や引きこもり傾向のある子どもやその保護者に度々使っている。

最近、家から殆ど出ない不登校児が家にいても、余り心配していない保護者に出会うことがある。保護者が働いて、お金があるうちは保護者の勝手かもしれないが、社会性を育てなければ、本人にとってその後の人生が悲惨なものになるだろう。学校に行く行かないよりも、社会性を付けるために、適応指導教室などの小集団や、フリースクールや、たまり場のようなところに繋いだり、或いはアルバイトやボランティアなどに従事するなど、なんでも良いので何かしら外に出る機会を作っておくことは大切である。それが最終的な自立に繋がって

いくだろう。

子育ての最終目標はこどもの自立である。一人で働き、生活の糧を得て、小さくても自分の棲家を持ち、金銭管理をし、税金など払うべきものを払い、健康管理をし、衛生的な生活をしながら食していくことが出来るようにすることである。困った時には誰かに助けを求めることが出来る力も養わなければならない。これらが出来て、子育ては一段落なのである。

しかしながら、家にいて、自分の部屋にこもり、食事も洗濯も、風呂も、すべて用意してもらい、片づけも掃除もすることもなく、室内にあるテレビやゲームやパソコンをやりたい放題やって、だらだらと好き勝手に過ごしていたら、誰も、苦痛の多い社会生活を営む気になどならないだろう。引きこもりの子を外に出す為に、部屋の戸を壊した人もいるし、家が火事になったことで引きこもっていた子が働きだしたという例もある。家から出たいと思わせるには、自分の部屋を取り上げ、皆で川の字になって寝るような、狭い家に引っ越せばよいのかもしれない。自分のプライバシーが欲しい子は、一日も早く家を出ることを考えるだろう。それが自立への一歩である。

親をあてにし、良いだけ親の世話になり、時には暴力をふるい、最後は親の年金や貯金で暮らしている40代50代の引きこもりを外に出すことはとても難しい。そうなる前に、子どもを外に出すように保護者は頑張らなければならない。そのためにこの言葉を伝えている。

英語では・・・

It is too late to grieve when the chance

is past. (好機を逃してから悲しんでも遅すぎる。)

今回はここまで。

出典紹介

### 鶡冠子

「博選」「着希」「夜行」「天則」「環流」「道端」「近迭」「度万」「王鉄」「泰鴻」など 19 篇が現存する先秦楚国の賢人鶡冠氏の著述《鶡冠子》は、内容が人材の選抜、占星術、政治、戦備などの広範囲にわたるので、中国古代哲学思想や古代社会政治の研究にとって重要な価値を有する道家典籍と見なされている。しかし、難解な部分が随所にあるため、多くの研究者に敬遠されてきた。

「一葉・・・」は、上巻の第 4 篇「天則」中に書かれている。

えききょう

### 易経

古代中国の占筮(細い竹を使用する占い)の書である。符号を用いて状態の変遷、変化の予測を体系化した古典。中心思想は、陰陽二つの元素の対立と統合により、森羅万象の変化法則を説く。著者は伏羲とされている。中国では『黄帝内経』・『山海経』と合わせて「上古三大奇書」とも呼ぶ。

**莊子** 中国、戦国時代の思想家。道家思想の中心人物。名は周、字は子休。莊子は尊称で「そうじ」ともいう。儒教の思想に反対し、人為を捨てて無為自然に帰ることを解いた。『莊子』(そうじ、そうし)は、莊子(莊周)の著書とされる道家の文献。現存するテキストは、内篇七篇・外篇十五篇・雑篇十一篇の三十三篇で構成される。